

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

結句		転句		承句		起句		詩題
今 ○		初 ○		連 ○		來 ○		
日 ●		知 ○		延 ○		者 ●		
紅 ○		甘 ○		老 ●		感 ●		
焼 ○		食 ●		舗 ●		興 ●		
獅 ○		恍 ●		恣 ●		仰 ●		
子 ●		如 ○		閑 ○		牌 ○		
頭 ◎		夢 ●		遊 ◎		樓 ◎		

来者…来る者、したって来る者
 感興…興味(おもしろみ)を感じる
 牌楼…中国の市街に立っている鳥居の形をしたやぐら門
 連延…つらなりつづく 閑遊…のどかに遊ぶ
 甘食…うまい食物 恍…うつとりしているさま
 红烧獅子頭…こぶし大の肉団子の醤油煮込み

その他のメモ	
横浜中華街の老舗・華勝楼に行つて食事をした折、 巨大な肉団子の煮込みが出てみました。 まずふわつとした食感で、薄味の上質な醤油煮込みの とろみもあり、大変気に入りました。	絶品な料理に偶々巡り合えた感激を作詩してみました。

読み下し文	
今日は 红烧獅子頭なり	初めて知る甘食 恍は夢の如し
連延する老舗 閑遊を恣にす	来る者感興し 牌楼を仰ぐ
金港中華街の好日	

作詩日 平成二八年六月三〇日	仄起式	名前 牛山 知彦
-------------------	-----	-------------

神漢連 九詩期会 詩箋 [七言絶句]

語註・典故・作詩メモ				結句	転句	承句	起句	詩題
金港：横浜港 湾橋：Bay Bridge 来往：行き来 のつもり				来 ●	白 ●	眺 ●	盛 ●	金港に遊ぶ
				往 ●	鷗 ○	望 ○	夏 ●	
				流 ○	漂 ●	湾 ○	船 ○	
				雲 ○	泊 ●	橋 ●	中 ○	
				任 ●	指 ●	摩 ○	金 ●	
				去 ●	呼 ○	天 ○	港 ●	尤韻)
				留 ◎	間 ●	楼 ◎	遊 ◎	

その他のメモ

読み下し文			
来往流雲去留に任す	白鷗は漂泊す指呼の間	眺望す、湾橋 摩天楼	盛夏船中金港に遊ぶ

作詩日	仄起式	名前
H 28 . 6 . 29		
		武田 一郎

神漢連 九詩期会 詩箋 [七言絶句]

語註・典故・作詩メモ				結句	転句	承句	起句	詩題
溽暑：むしむしした暑さ 白天：昼間				到 ●	香 ○	白 ●	漫 ●	華街漫歩
				来 ●	煙 ○	天 ○	歩 ●	
				公 ○	礼 ●	飯 ●	華 ○	
				園 ○	拝 ●	店 ●	街 ○	
				広 ●	関 ○	客 ●	溽 ●	東韻)
				夏 ●	帝 ●	人 ○	暑 ●	
				空 ◎	廟 ●	充 ◎	中 ◎	

その他のメモ

読 み 下 し 文			
到来公園夏空広し	香煙礼拝す関帝廟	白天飯店は客人で充る	漫歩す華街溽暑の中

作詩日	仄起式	名前
H 28 . 6 . 29		
		武田 一郎

結			転			承			起		
玄	○	△	如	○	△	仰	●	△	登	○	△
天	○	○	走	●	●	視	●	●	蹊	○	○
閃	●	△	風	○	△○	西	○	☆	汗	●	△
爍	●	●	来	○	○○	方	○	○	滴	●	●
輝	●	●	烟	○	○○●	霧	●	☆	已	●	●
士	○	○	散	●	●○	杳	●	●	高	○	○
峰	○	◎	盡	●	●●	濃	○	◎	舂	○	◎
玄天閃爍し士峰を輝かす。			走 <small>か</small> 如く風来にて烟散り尽し。			西方を仰視するも霧杳として濃なり。			蹊を登り汗滴り已に高舂。		
題 登山望富嶽											
大山に登富嶽を望む											

平起式 〔冬〕 韻 名前辰巳佳樹

読み下し文

神漢連 九詩期会 詩箋 〔七言絶句〕

語註・典故・作詩メモ	結句	転句	承句	起句	詩題
観音崎は三浦半島東端に位置し東京湾（浦賀海道）に面す。夏になると海水浴客で賑わい、グルリと巡れば、天平時代に行基が退治した大蛇の住む海食洞があったり、日本で初めての西洋式灯台や、江戸末期のペリー撲滅の砲台跡などが立地する。 ガリバー旅行記で「ガリバーが日本に入港した場所ザモスキが観音崎だ」として「夢多き町おこし」が行われている。 ※「游」と「遊」の字解↓白川静「字統」参照	俯 ●	回 ○	潮 ○	浦 ●	遊観音崎 （先韻）
	見 ●	碕 ○	光 ○	賀 ●	
	游 ○	不 ●	点 ●	海 ●	
	人 ○	厭 ●	点 ●	門 ○	
	捕 ●	登 ○	釣 ●	波 ○	
	黒 ●	丘 ○	師 ○	蕩 ●	
	蝮 ◎	頂 ●	船 ◎	円 ◎	

作詩日 平成二十八年七月吉日

名前 原田睦夫

文 し 下 み 読			
観音崎に遊ぶ かんのんざき あそぶ	浦賀の海門 うらが かいもん	波蕩円なり は とうまじか	潮光 ちようこう
	点点 てんてん	釣師の船 つりし ふね	
	碕を回りに かし めぐ	厭わず いと	丘の頂に登り おか いただき のぼ
	俯みて見る かが みる	游人の黒蝮を捕るを ゆうじん くろ にな と	

その他のメモ

私は以前ほぼ毎年この浜辺に潜り尻高（黒蝮）を捕って游んだ。

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

結句	転句	承句	起句	詩題
神 ○	爆 ●	地 ●	稀 ○	天災を嘆く (侵韻)
明 ○	雨 ●	怒 ●	糟 ○	
乞 ●	強 ○	天 ○	気 ●	
願 ●	風 ○	威 ○	象 ●	
勿 ●	南 ○	惑 ●	禍 ●	
更 ○	北 ●	衆 ●	災 ○	
侵 ◎	里 ●	民 ◎	新 ◎	

最近の傾向とはいえ、今年の梅雨は特に酷い状況です。東北地震の復興が進まない中、九州地区で頻発する地震、各地での大雨、洪水、それに竜巻と、例年にない被害が発生し、拡大しています。このような天災に対し、人は何のなす術もありません。これ以上、苦しめることは止めて頂きたい、とただ神にお願いするのみです。

読み下し文				作詩日	平起式	名前
神明 <small>しんめい</small> に乞願 <small>きつがん</small> す更に侵 <small>おか</small> す勿 <small>なか</small> れと	暴雨 <small>ばくう</small> 強風 <small>きやうふう</small> 南北 <small>なんぼく</small> の里 <small>さと</small>	地 <small>ち</small> は怒 <small>いか</small> り天威 <small>てんおど</small> して衆民 <small>しゅうみん</small> 惑 <small>まど</small> う	稀糟 <small>きそう</small> の気象 <small>きしやう</small> 禍災 <small>かさい</small> 新 <small>あら</small> たなり	平成一六年七月三日		三浦 昭二

その他のメモ
【稀糟】まったくひどい

